



# 京大広報

No. 639

2008.11



第11回京都大学国際シンポジウム  
—関連記事 本文2754ページ—

## 目次

所感	監事 平井紀夫	2752
〈大学の動き〉		
ドイツ連邦共和国教育研究大臣講演会を開催		
.....		2754
第11回京都大学国際シンポジウムを開催		2754
新管理運営機構及び副理事、理事補の任命について		2756
機構長等が発令される		2757
部局長の交替等		2757
〈部局の動き〉		
法学研究科がマックス・プランク外国私法及び		
国際私法研究所と学術交流協定を締結		2758
〈日誌〉		2758
〈寸言〉		
“ものづくり”に違和感を覚えて		
森 雅彦		2759
〈随想〉		
本質を追求する生き方		
名誉教授 中村行宏		2761
〈洛書〉		
アブラムシ	三上章允	2762
〈榮譽〉		
益川敏英名誉教授らが京都府特別榮譽賞を受賞		2763

## 〈話題〉

小林 誠 高エネルギー加速器研究機構名誉教授		
へのインタビュー		2763
近畿地区国立大学体育大会の成績		2767
全国七大学総合体育大会の成績		2768
中学生向けゼミ体験講座		
「京都大学ジュニアキャンパス2008」を開催		2769
「京都大学シニアキャンパス2008」を開催		2769
宇治地区自衛消防団が消防訓練大会に参加		2770
防災カフェを開催		2770
宇治キャンパスクリーン作戦を実施		2771
〈訃報〉		2771
〈お知らせ〉		
無料法律相談のお知らせ—12月実施分について		
申し込みを受付中—		2772
能楽鑑賞会		2772
生態学研究センター オープンキャンパス		2773
〈隔地施設紹介〉		
防災研究所附属地震予知研究センター		
北陸観測所		2774

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 所感

監事 平井 紀夫

京都大学では、尾池総長から松本総長に交代され、10月1日より新しい体制の下で業務がスタートいたしました。平成20年4月より監事に就任して6ヶ月が過ぎ、本年度後半を迎えています。

年度半ばを過ぎた時点で、監事監査の位置づけについて、今年度の監事監査計画、そしてこれまでの監事監査を通じて感じたことなどについて「所感」として述べたいと思います。

### 1. 監事監査について

国立大学法人京都大学においては、会計検査院検査、会計監査人監査、監事監査、監査室監査の四種類の監査が行われています。会計検査院検査は、独立の機関として会計などの検査(正確性・合规性・経済性・効率性・有効性)を行っています。会計監査人監査は、独立の立場から財務諸表等に関する監査を実施しています。監事監査は、京都大学の業務全般の執行状況に対して適法性・妥当性の監査を実施するものです。監査室監査は、大学の内部監査として業務運営および会計処理の適法性を監査しています。

これらの監査の相違について簡潔に説明することは容易ではありませんが、監事監査は、業務全般(会計のみならず業務全般)を対象としたものであり、その範囲も適法性だけでなく妥当性も含めたものとなります。したがって、監事監査を通じて、京都大学の業務全般の執行状況を正確に把握しつつ、京都大学が掲げた目標を達成できるように、策定された目標の遂行状況を注視し、必要に応じて意見を述べていきたいと考えています。

### 2. 平成20年度監事監査計画について

今年度の監事監査計画について説明させていただきます。その内容については、既に監事ノート(1)(2008年6月26日)で説明していますので、ここでは省略し、今年度の監事監査を実施するにあたって、特に留意していこうと考えている点について説明させていただきます。

定期監査は、一年間の業務全般の執行状況を監査するものですが、限られた期間で多岐にわたる業務を監査することになりますので、その全容を監査す



ることはなかなか困難な状況です。したがって、定期監査で行うべき監査の一部を事前に実施したいと考えています。たとえば、個人情報保護に関する監査、環境安全衛生に関する監査など一部の監査を定期監査の

事前監査と位置づけて実施していきたいと考えています。

臨時監査は、中期計画の中から特定の項目を監査項目として選択し、監事監査を実施いたします。本年度は、従来の臨時監査テーマと共に「大学の社会的責任」にも注目したテーマ(社会貢献やコンプライアンス)を定めています。こうした特定のテーマに関して監事監査を実施し、中期目標の達成につながるような意見や業務の質的向上につながるような意見を述べていきたいと考えています。また、臨時監査は特定のテーマを対象としていますので、業務全般についての改善意見や本質的な課題に対する改善意見を述べることは困難ですが、臨時監査に際しても、可能な限り業務全般についての執行状況や本質的な課題についての取り組み状況を監査し、業務全般についての改善意見や本質的な課題に対する改善意見を述べるように努力していきたいと考えています。さらに、大学内で業務遂行のモデルとなるような事例を見出し、その取り組み内容を提示し、各部門、各部局がそのモデルを参考にして独自の改善をしていただけるように努めていきたいと考えています。

### 3. 監査を通じての所感

#### 3.1 目標の明確化の必要性

平成19年度監事監査報告書において、定期監査の監事意見として、「年度計画を更にブレイクダウンし、年度計画に沿ってその目標状況を明確にしていくことが求められる。目標状況を明確にすることにより、目標達成の度合いがより明確になるからである。平成20年度に取り組む〈目標管理の実質化〉と整合しつつ、目標の明確化に取り組んでいく必要がある。」と



述べました。

この監事監査報告書では、大学全体の年度計画の明確化、つまり、本部の各部門および各部局の年度目標の明確化を提言しています。年度目標の明確化とは、それぞれの構成員が年度目標を共有できるように、年度目標の達成した状況をできる限り明確にしていくことなのです。そのためには、まず自組織にどのような課題があり、その中で何が重要な課題であるかを明確にしていかなければなりません。さらに中期目標・中期計画から考えて、これからどのようなテーマに取り組まなければならないかを明確にしていかなければなりません。こうしたプロセスに構成員が参画することを通じて、構成員が自組織の取り組むべき目標を共有することができるのです。

次に、年度目標の達成状況が具体的にかつ分かりやすく定められなければなりません。このような年度目標を設定することによって、組織構成員一人ひとりが向かうべき目標を共有でき、さらに自らの果たすべき役割を自覚するようになるのです。また、目標を達成するためには、経営資源(人・物・金・情報・時間など)の何をどれだけ強化しなければならないかも明らかになります。さらには、構成員一人ひとりの能力をどのように強化していかなければならないかも明らかになるのです。

達成すべき目標状況が明確であれば、達成できたか、達成できなかったかも明らかになります。達成できた時の喜びは何物にも代えがたい喜びであり、次の目標へ向かう力と意欲を与えてくれます。もし達成できなかったとしても、どの程度達成できたか、達成するためには何が必要であるかが明らかになります。これからの目標達成に必要な力を養うチャンスにもなるのです。

### 3.2 「対話」の重要性

京都大学の基本理念において、教育における「対話」の重要性が掲げられていますが、業務を遂行していく過程においても、学内外の関係者との「対話」が大変重要であると考えます。誰もが業務を遂行していく過程で多くの学内外の関係者に対応することになります。業務遂行の考え方やその内容を明確にしつつ、業務を遂行していくわけですが、必ず関係者から多くの意見(反対意見や賛成意見や提案など)が出されます。自説を曲げず主張し、理解を深めてもらうことも必要ですが、関係者からの意見を咀嚼し、業務遂行に役立てていくことが最も重要です。「対話」は一方通行では不可能であり、双方向でなくてはなりません。「対話」は関係者との相互アクションでなくてはなりません。このような学内外の関係者との「対話」の継続が、質の高い業務遂行を実現する最良の道であると考えます。

以上のように、目標を明確化し、目標に挑戦していく過程における「対話」を通じて、それぞれの組織が成長し、その構成員一人ひとりも成長していくことができるのではないのでしょうか。また、組織としての充実感が生まれ、構成員一人ひとりが仕事にやりがいを感じるようになるのではないのでしょうか。

監事に就任して半年ばかりで、京都大学の業務の実態を十分理解せずに、意見を述べたところもあるかもしれません。監事としても、これからの監事監査を通じて、本部の各部門および各部局の皆さんと「対話」させていただきながら、監事監査をより充実したものにしていきたいと考えています。

引き続き皆様方のご協力、ご支援をお願いいたします。



## 大学の動き

### ドイツ連邦共和国教育研究大臣講演会を開催

10月6日(月)、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、ドイツ連邦共和国教育研究大臣 Annette Schavan 氏の講演会を開催した。主催はドイツ連邦共和国教育研究省及び京都大学で、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館が後援した。



講演の様子

講演に先立ち、Schavan 大臣、Daerr 駐日ドイツ大使等と西村周三理事・副学長、大西珠枝理事・副学長、及び横山俊夫国際交流推進機構長との懇談があり、学術交流等についての意見交換を行った。

講演会は、横山機構長の司会により進行し、西村

理事・副学長から本学とドイツの大学との継続的な交流等について触れながらの開会の挨拶に始まった。「多国間研究政策—グローバル化の課題に立ち向かうために—」(Optionen multilateraler Forschungspolitik zur Bewältigung globaler Herausforderungen) と題して大臣による講演があり、会場には、学生や教職員、研究生など、京都大学内外から多数の参加があった。

講演の中で、教育研究大臣という立場から学術の持



講演後握手を交わす Schavan 大臣(右)と西村理事・副学長(左)

つ大きな可能性について言及され、特に世界各国に共通の課題である、少子高齢化や地球温暖化の問題についても独自の視点から話された。

また、講演後の質疑応答では、予定時間を超えて活発な意見交換が行われ、拍手の中惜しまれながら終了した。

(国際部)

### 第11回京都大学国際シンポジウムを開催

10月9日(木)から11日(土)にかけて、上海の復旦大学キャンパスにおいて、「第11回京都大学国際シンポジウム：Frontier Bioscience in Modern Medicine」を開催した。京都大学国際シンポジウムは、平成12年度から毎年、本学が誇る独創的な学術研究を世界に語りかけ、世界に開かれた大学として先端的な学術研究を積極的に展開していくために、世界各地で開催している。

今回の発表者・聴講者合わせての出席者は、学術報告と対話が行われた2日間で延べ約700人であった。開催協力校の復旦大学をはじめ、浙江大学、南京大学、第四軍医大学、四川大学、華南科技大学、南京医科大学など中国各地の大学の医薬系の研究者・学生を中心に多数の出席者があり、大きな盛り上がりを見せた。

シンポジウムは、上海ヒルトンホテルで行われた

9日夜のレセプションから始まった。湊 長博医学研究科教授(実行委員会委員長)の司会・進行により、まず松本 紘総長のオープニングスピーチが行われ、続く復旦大学の Shenhong WANG 学長、中村孝志医学部附属病院長による祝辞の後、光山正雄医学研究科長の乾杯をもって開始、中国各地からの来賓のスピーチに耳を傾けつつ、出席者同士親交を深めた。



満員の会場

10日からは復旦大学上海医学院の明道楼に会場を移し、湊教授の司会・進行により、最初に松本総長と復旦大学の Weiping WANG 理事から開会の挨拶が行われた。松本総長は、近年発展の著しい医学の分野において、国際連携がますます重要になってきている中、特に中国との大学間交流によって生み出される人類史的貢献の高さについて述べ、今後の両国関係の前途を祝った。各セッションでは、分子生物学や iPS 細胞など、本学が誇る先端医学研究に関わる17名の発表者(医学研究科、ウイルス研究所及び再生医科学研究所)と、復旦大学上海医学院から

4名、計21名の発表者によって、研究報告が行われた。会場には初日から多くの聴講者が訪れ、真剣な質疑応答が展開、2日目には収容人数を上回り、立ち見の聴講者も出るほどであった。

また、コーヒープレイクでは、本学の「英文概要」や「外国人研究者ハンドブック」及び医学研究科による留学案内「To Students and Researchers from China(中国からの留学生および研究者の受入体制について)」を設置したコーナーにたくさんの人が押し寄せ、このシンポジウムを機に、中国における本学への関心が高まったことが感じられた。



復旦大学 Weiping WANG 理事による開会の挨拶

最終日のセッション終了後には、Xiaoyuan FENG 上海医学院長及び横山俊夫国際交流推進機構長からの閉会挨拶の中で、シンポジウムの成功と、関係者の協力への謝辞があり、本学、復旦大学の両大学及び日中間の学術交流のさらなる展開を願って幕を閉じた。

(国際部)

## 新管理運営機構及び副理事、理事補の任命について

京都大学では、本学の抱える重要課題や新たな課題について、より広く部局の実情等を踏まえた多様なアイデアを吸収し、迅速かつ確に対応できる体制を整備することを基本として、そのために必要な補佐体制の充実を図ることとなった。

情報を速やかに収集・発信し、共有できる仕組みとして、10月より設置した総長室のほか、従来の副学長に加えて、総長と理事を補佐して大学運営に加わる新たな職として、下記のとおり副理事、理事補、総長顧問及び総長特別補佐を設けることとし、11月1日付けで副理事、理事補が指名された。

副理事：総長を補佐し、総長の定めるところにより業務を掌理する職として置く。

理事補：理事を補佐し、理事の分担する事項について、企画立案、連絡調整を行う職として置く。

総長顧問(非常勤)：総長が抱える特定の重要課題について、相談ができる職として置く。

総長特別補佐：総長が定める特定事項を処理し、大きなミッションなど特定の専門的知識に基づき処理を行う職として置く。

### 副理事(任期はいずれも平成20年11月1日より)

北村 隆行(高等教育研究開発推進機構長)	任期：平成21年3月31日まで
藤井 讓治(図書館機構長・附属図書館長)	任期：平成22年9月30日まで
佐治 英郎(環境安全保健機構長)	任期：平成22年9月30日まで
松山 隆司(情報環境機構長)	任期：平成22年9月30日まで
横山 俊夫(国際交流推進機構長)	任期：平成21年3月31日まで
牧野 圭祐(産官学連携本部長・産官学連携センター長)	任期：平成21年3月31日まで
中村 孝志(医学部附属病院長)	任期：平成22年9月30日まで
大寫幸一郎(工学研究科長)	任期：平成22年3月31日まで
代谷 誠治(原子炉実験所長)	任期：平成21年3月31日まで

### 理事補(任期はいずれも平成20年11月1日より)

藤井 秀樹(経済学研究科教授)	任期：平成22年9月30日まで
村中 孝史(法学研究科教授)	任期：平成22年9月30日まで
稲葉 カヨ(生命科学研究科教授)	任期：平成22年9月30日まで
岸本 佳典(総務部長)	任期：平成22年9月30日まで
淡路 敏之(理学研究科教授)	任期：平成22年9月30日まで
南川 高志(文学研究科教授)	任期：平成22年9月30日まで
際本 泰士(人間・環境学研究科教授)	任期：平成21年3月31日まで
伏木 亨(農学研究科教授)	任期：平成22年9月30日まで
高見 茂(教育学研究科教授)	任期：平成22年9月30日まで

## 機構長等が発令される

大西有三図書館機構長の任期満了に伴い藤井讓治文学研究科教授が図書館機構長に、並びに牧野圭祐エネルギー理工学研究所教授が産官学連携本部長に11月1日付けで指名された。また、佐治英郎環境安全保健機構長、横山俊夫国際交流推進機構長及び松山隆司情報環境機構長が11月1日付けで再指名された。

### ◆図書館機構長(新任)

任期：平成20年11月1日  
～平成23年3月31日



藤井 讓治

### ◆産官学連携本部長(新任)

任期：平成20年11月1日  
～平成21年3月31日



牧野 圭祐

### ◆環境安全保健機構長

任期：平成20年11月1日  
～平成22年9月30日



佐治 英郎

### ◆国際交流推進機構長

任期：平成20年11月1日  
～平成21年3月31日



横山 俊夫

### ◆情報環境機構長

任期：平成20年11月1日  
～平成22年9月30日



松山 隆司

## 部局長の交替等

### 附属図書館長(新任)

藤井讓治文学研究科教授(歴史文化学専攻日本史学講座担当(日本近世・近代史))が、大西有三附属図書館長の後任として、11月1日付けで選出された。任期は平成23年3月31日まで。

### 大学文書館長(再任)

藤井讓治文学研究科教授(歴史文化学専攻日本史学講座担当(日本近世・近代史))が、11月1日付けで大学文書館長に再任された。任期は平成22年10月31日まで。

## 部局の動き

### 法学研究科がマックス・プランク外国私法及び国際私法研究所と学術交流協定を締結

9月12日(金)、大学院法学研究科において、初宿正典法学研究科長と Klaus J. Hopt マックス・プランク外国私法及び国際私法研究所代表による、学術交流に関する一般的覚書及び一般的覚書に基づく議定書の調印式が行われた。

マックス・プランク外国私法及び国際私法研究所は、ドイツ連邦共和国のマックス・プランク協会に属する研究所の一つであり、主に私法の比較的研究を行っている。その活動は、個別の研究プロジェクトの推進、国内裁判所への外国私法・国際私法に関する鑑定書の提出、諸外国への法整備支援、ヨーロッパにおける私法の統一への寄与等の形で多様に展開されている。同研究所と法学研究科は、これまで行ってきた人的交流に制度的基盤を与えるために、交流協定の締結に至ったものである。

協定の締結により、両研究機関に属する研究者には、相手方研究機関における中長期の研究遂行の機会が与えられる。これにより、相手方研究機関の豊富な文献等の利用が容易になり、また研究者間の一層の交流が図られるだけでなく、それぞれの日本と

ヨーロッパにおける活動拠点が提供され、比較法的研究が一層充実することが期待される。

なお、法学研究科が単独で外国の機関と締結した部局間学術協定の第1号となった同研究所との協定に続き、9月24日には台湾の国立政治大学法学院において、また同月26日には国立台湾大学法律学院において、それぞれの機関と法学研究科との部局間学術交流協定を締結した。



協定書を交換する初宿研究科長(右)と Hopt 代表

(大学院法学研究科)

## 日誌 2008.9.1 ~ 9.30

9月3日 「倫理への問いと大学の使命」シンポジウム  
 9日 部局長会議  
 ♪ 全学情報セキュリティ委員会  
 ♪ 研究科長部会  
 12日 全学教育シンポジウム  
 16日 教育研究評議会  
 ♪ 役員会  
 ♪ 保健衛生委員会  
 17日 京都大学と京都精華大学との連携協力に関する基本協定書の調印式及びマンガ完成披露

17日 国際交流委員会  
 19日 施設整備委員会  
 ♪ 学生部委員会  
 20日 ジュニアキャンパス2008(～21日)  
 24日 博士学位授与式  
 ♪ 役員会  
 26日 図書館協議会  
 29日 財務委員会  
 30日 総長退任式



## 寸言

## “ものづくり”に違和感を覚えて

森 雅彦

1981年、医者の子が医学部へ進学するように、工作機械屋の息子である私は京都大学工学部機械学科(現：京都大学工学部精密工学科)へ入学しました。3回生からは垣野助教授(現：名誉教授)のもと、



切削及び機械運動精度測定の研究をしました。今では取り壊されてしまいましたが、大学設立当時からある赤レンガの研究実験棟では、素材の選定から鋳物の切削まで、青いつなぎの作業着を着て毎日夜遅くまで切削試験をしたことを覚えています。その後、総合商社で機械担当として8年間勤務し、1993年から家業の工作機械メーカーへ戻り、1999年から10年社長業に従事していますが、すべて京都大学での4年間が大きな基礎となっています。

学生時代は、長く尊敬できる先生方や気の合う仲間達と出会うことができ、少し学んで良く遊んだ、充実した学生生活を送ることができました。自由な時間を過ごすことを許された当時は、後悔を残さぬよう思いっきり遊びました。当時出始めの聖護院のワンルームマンションに下宿していました。お盆になると、ベランダからは大文字の送り火が真正面に見え、大勢の仲間たちを集め、朝まで小宴会を行ったものです。

西部講堂の横にBoxがあった文化系サークルの写真部に所属していました。京都ならではのサブカルチャーを経験できたことは何物にも代えがたい思い出になっています。今でもその当時の写真は大切に保管しており、秋の気配が近づいてくるとたんすから引っ張り出しては、当時に思いを馳せています。大学生協には大変お世話になりました。毎年、春・夏休みは、生協で購入した航空券で、イギリスを中

心に欧州へ旅に出ました。香港、バンコク、ドバイの南回り経由のロンドン、ガトイック空港行き航空券は安く手に入れることができました。とても懐かしい。売上維持のため、現在もやむなく年に20回以上海外出張へ出かけますが、将来時間ができれば再び南回りのロンドン行きに挑戦してみたいと思います。

1985年に卒業してからも幸いにして京都大学とは継続的な関係を保つことができています。卒業後すぐに、機械系の同窓会である京機会へ入会させていただき、本年度は監事に就かせていただいています。上下左右の多方面でご活躍されている多くの諸先輩方、後輩達とお付き合いさせていただききっかけとなりました。すばらしく組織化された同窓会です。商社時代は、京都大学担当のリクルーターとして多くの面接に立会い、京大生の就職活動相談に乗りました。学生時代にお世話になった垣野先生の研究室とは、現在も仕事上の関わりがあり、後継の松原先生と超精密加工の共同研究を京都の北山で行っています。そして今年の11月より、経営協議会委員を拝命することになりました。卒業して25年経ち、再び懐かしの地へ定期的に足を踏み入れる理由ができ、今から楽しみです。

私が従事している工作機械産業は、日本が過去20年以上もの間、連続で世界一の生産量を維持している数少ない産業です。鋳物、電子部品、自動車、電機、造船、航空宇宙、医療など主要な顧客層に恵まれた日本は、世界有数の機械産業クラスターを形成しています。但し、工作機械市場は全世界で4～5兆円規模と大変小さく、全世界のGDPの0.1～0.2%しかありません。従いまして、売上及び利益のボラティリティは大きく、1992-93年、2002-03年、そして現在2008-09年の設備投資需要の減少局面では、その影響をまともに受ける産業です。過去の景気後退期、特に1990年代には、当社も売上が前年度比で50%近く急降下するなど厳しい環境に陥ったことも

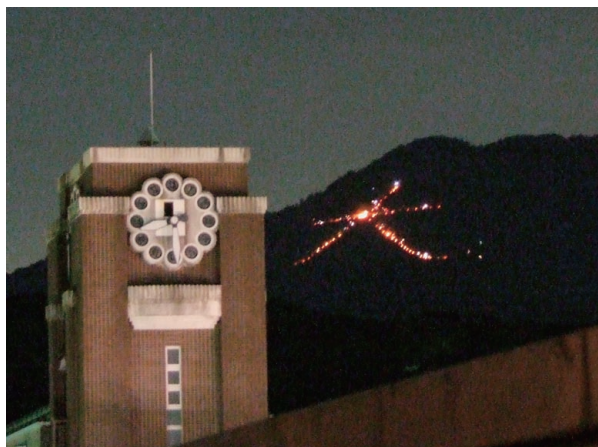
ありました。このような経験を踏まえ、我々は研究開発や人材育成をまじめに工学的に取り組み、経営の多角化(私は顧客の地域・規模・業種の多角化と呼んでいます。)を図ってきました。その結果、現在の金融危機からくる不況下においても、ある程度の利益を確保すること、売上を維持することができるようになりました。また現在の不況は、これまでの好況時に忙しくてできなかったこと、人の教育、体制の強化など会社の体力を蓄える絶好の機会と捉えています。これまでの歴史から見ましても、不況の後には必ず景気が良くなる、2,3年後には必ず景気は良くなるかと信じております。今はじっと我慢をし、中期、長期的な経営をしていくことが大事になります。

しかしながら、私には非常に心配していることがあります。それは言葉のひらがな化、カタカナ化です。金融工学という新しい学問領域が漢字で表されているのにも関わらず、日本の強みでもある製造業や、我々の業界での工学的な研究や活動に対し、1990年代末から2000年にかけて、“ものづくり”などに代表される、安易に言い換えられた言葉が使用さ

れるようになってきています。私はこの“ものづくり”という、製造業をひらがなにする風潮が嫌いで、“ものづくり”と表現することで、製造業に携わっている方々を馬鹿にしている、またこのひらがな化、カタカナ化により何事もあいまいにしているように感じるわけです。わざわざ平仮名にしなくとも読めますし、難しい言葉に説明を加えることなくそのままカタカナにしてしまった結果、その言葉の本来の意味が分からないということも大いにあるのではないかと感じています。私が学んできた機械工学、精密工学、製造工学も今ではカタカナ化が進んでいます。

諸後輩達には、安易に変換された言葉に惑わされることなく、その言葉の本来持つ意味を良く理解し、物事の本質を見抜く力を養っていただきたいと思います。また、学生に与えられた自由な時間を存分に利用して、京都大学で一流の先生方の下で学ぶことへの喜びとともに、リベラルアーツを学ぶことにも励んでいただきたいと思います。

(もり まさひこ 株式会社森精機製作所取締役社長 昭和60年工学部卒)



## 随想

## 本質を追求する生き方

名誉教授 中村 行宏



このごろ、本質を求めて揺らぐことのない生き方について考えることがある。きっかけは20年来のドイツ人の友人である。フリードリヒ・エーデルマンといい、長らくミュンヘンのオーケストラの首席ファゴット奏者を務めた。3年ほど前にオーケストラを辞し、チェロ奏者の妻、レベッカ・ラストと一緒に世界各地で室内楽コンサートやマスタークラスを開いている。このミュンヘン・フィルに首席指揮者として17年間君臨したのがセルジュ・チェリビダッケである。チェリビダッケは一般のマスコミにとりあげられるようなスター指揮者ではない。ご存知ない方も多いと思う。ただ、世界中に熱烈なファンがおり、クラシック音楽愛好家の間では20世紀が生んだ巨匠指揮者のひとりと目されている。彼は生前、原則として録音を許さなかった。彼の指揮を聴きたければ、コンサートホールへ行くか、誰かがこっそり録音した輸入の海賊盤を探し出すしか方法はなかった(\*)。この録音嫌いは、彼の音楽観・演奏論に基づいている。エーデルマン氏から聞いたチェリビダッケの音楽への取組み方、生き方が標題に結びついた。

広く外国でも読まれている「ミュンヘンタ刊(アーベントツァイトウング)」のオーナー夫人が「何故あなたは録音をなさないの。録音すれば、あなたならカラヤンに負けないほど有名になれますのに」と質問した。チェリビダッケは間髪をいれず、「有名というならコココーラも大変有名ですよ」と応えた。翌日の新聞の一面には「チェリビダッケ曰く、カラヤンはコココーラの如し!」との大見出しが付いた。彼は、カラヤンその人を評価した訳ではなく、「名声」の価値ということについての自分の考え方を述べたに過ぎなかったが、その後物議をかもしたそうである。

彼は、音楽とは、ひとつのものとして生み出され、ひとつのものとして聴かれるべきものであると確信していた。開始から終結までのひとつの統一体であり、スタジオ録音において必ず行われるテープの分割や継ぎはぎなどという作業はもっての外というこ

とである。音楽作品の如何なる一音にも、その統一体の創始も、中間も、完結も含んでいるというのがチェリビダッケの哲学であり、演奏上の最も大切な原理・原則であった。だから、録音して、それを演奏時と全く異なる時空において聴かせるなどということは許せることではなかった。チェリビダッケはエーデルマンに、実演と録音との音楽の違いについて、「実生活上のブリジッド・バルドーと彼女の白黒写真との違いのようなものである」と言ったとのこと。理想の音を追求する彼の訓練は厳しいことで知られている。納得の行くまでリハーサルを要求するので、楽団員が恐れをなし、彼を客演指揮者に迎えることができたオーケストラは多くはない。彼は米国のプロ・オーケストラを一度も指揮しなかった。1996年8月14日、世間に迎合しない生き方を貫いて彼は永眠した。

一方、長年、企業の研究所、大学を通じて情報通信分野での研究・教育に携わっている私には、経済性、効率化が主要なファクタとなっている現在、残念ながらチェリビダッケのように生きるのは大変難しい。また私に限らず、世間の評価や意向に左右されることなく、自らの目指すものの本質を捉えてじっくりと取組むということが大変難しい時代になっていると思う。折から、日本人の4名の研究者にノーベル物理学賞と化学賞が決定したとの朗報が飛び込んできた。受賞された先生方のお話からは、本質を大切に目標に向かっておのれの信じるやり方で粘り強く取組んでこられた様子がうかがえる。これをきっかけに理数系の仕事に憧れ、その楽しさを理解する子どもたちが増えてくれればと願わずにいられない。資源のないわが国を支える大きな力になっているのは、理系の皆さんの地道な頑張りである。それを尊いと評価する風土をとり戻したいものである。また、本質を捉えた、地に足の着いた取組みが世界的にも必須の情勢になってきた。天の意思であろう。

\*：没後、子息が放送用の録音などをCD化し販売することを許可した。

(なかむら ゆきひろ 平成19年退職 元情報学研究科教授、現立命館大学総合理工学研究機構教授、財団法人京都高度技術研究所所長、専門は計算機構成方式・設計方式)

## 洛書

## アブラムシ

三上 章允



私は京都大学に就職するまでは北海道に住んでいた。北海道は日本の中では異国のような場所である。北海道の中心都市、札幌には350近い仏教寺院があるが、キリスト教会の数も180近くある。植物や建物など、景色が違うだけでなく、住んでいる人々の考え方や生活習慣も日本の伝統からずれている。そんな環境で育ったためか、私は中学、高校の頃、京都に何となくあこがれていた。将来は天文学をやるつもりで生物学は履修せず、大学受験の直前まで京大理学部を受験を考えていた。しかし、親が医者であったこともあり受験の直前になって北大医学部を選択し、卒業後は脳研究の道へと進んだ。大学院のとき霊長類研究所の助手の公募があった。高次の脳機能をサルで研究したいという思いと、この機会に京都へ行けるのではないかという考えもあって応募した。実は応募の時点では霊長類研究所が京都からかなり離れた場所にあることを良く分かっていなかった。

1974年6月に霊長類研究所に採用され、北海道から愛知県犬山市にやってきた。それまで北海道を出て生活したことがなかったので、犬山に来てからは目にするものがいろいろと珍しかった。例えば、ゴキブリを生まれて始めて見た。1960年代に流行した「赤トンボの唄」の中に「アブラムシの足を取ったら柿の種」という歌詞がある。この意味を私は犬山に来るまで理解できなかった。私が知っているアブラムシは、カメムシ目のアブラムシ上科に属する昆虫、別名アリマキであった。私の見たことのあるアブラムシは緑色をしていて植物の茎についていた。アブラムシの足をもいだらどうして柿の種になるのだろうか？犬山に来てチャバネゴキブリを見て、またゴキブリのことをアブラムシと呼ぶことを知って、なるほど柿の種そっくりだと感心した。その後、研究

室で丸味をおびた「新種」のアリを見つけた。変わったアリを発見したと言ったら「それは、ゴキブリの幼虫だ」と笑われた。犬山市は歴史のある城下町で道幅が狭い。その狭い道を更にバスが走っていた。旧市街を歩くと、道がクランクに曲がっていて、そこに古い町並みが残っていた。少し郊外に行くだけで田畑や森があって、ホテルを見ることができた。春には桜が美しく、秋には紅葉が美しく自然に囲まれた犬山がすっかり気に入ってしまい、結局34年以上も犬山に住むことになった。

霊長類研究所は愛知県にあるものの、研究所の中には関西人が多い。そこで、新しい言葉にもであった。「みずや」が食器棚を指すことは説明を聞くまで分からなかったし、「さらのチューブ」が「新しいチューブ」、「ほかす」が「棄てる」の意味であることにも驚いた。単語だけでなく文章の理解にもとまどった。北海道では行間を読むようなことはあまりしない。書いてあること、聞いたことがその意味するところである。一方、伝統的な日本文化では、行間にこそ意味があるらしい。聞いたとおりに受けとるととんでもない間違いのことがある。日常生活でも会議の場でも、うっかり発言すると、言った以上の意味、行間を解釈されて戸惑うこともあった。この点は実は今でもよく分からずに、たびたび失敗している。

ここ10年あまり、インドネシアやタイでフィールド調査をおこなってきたが、東南アジアの国々を訪れると、行間を読むという文化は東アジア地域で共通にみられるようである。「Yes」は実は「No」であったりもする。欧米、中国、インド、中東などに比較して、東南アジアは日本に似ている。日本が失いつつある「良さ」を東南アジアは持っているように感じる。人と人とのつながりや、自然との関わり方や、それだけでなく、東南アジアの方が日本よりも活気がある。日本はいろいろな仕組みがきちんと整備されてしまっていて、自由度が少ない。東南アジアはまだ混沌としていて、その分いろいろな可能性がひらかれている。

(みかみ あきちか 霊長類研究所 教授 専門は神経生理学)

## 栄誉

### 益川敏英名誉教授らが京都府特別栄誉賞を受賞

10月7日にノーベル物理学賞の受賞が発表された益川敏英本学名誉教授及び小林 誠高エネルギー加速器研究機構名誉教授に対し、京都府から京都府特別栄誉賞が贈られることになった。

京都府特別栄誉賞は、特筆すべき業績により、京都府の名誉を世界的若しくは顕著に広め、広く府民に夢と希望、力と勇気、感動を与えたものに対し、その栄誉を称えるために贈られるものである。

今回の益川・小林両氏の同賞受賞は、素粒子理論の研究過程において、京都大学理学部助手時代に共同発表した「小林・益川理論」により2008年ノーベル

物理学賞を受賞され、京都府の名誉を世界的に広め、広く府民に希望と力などを与えたことに対し、その栄誉を称えるものである。

また同時に、京都大学並びに益川名誉教授が現在所属している京都産業大学に対し、自由な学問研究環境や教育環境などを生み出し、素粒子理論では故湯川博士以来半世紀ぶりの快挙となるノーベル賞受賞者の育成や、京都に育まれている基礎物理学の伝統の堅持・発展に貢献したとして、感謝状が贈られることになった。

(総務部)

## 話題

### 小林 誠 高エネルギー加速器研究機構名誉教授へのインタビュー

このたび益川敏英本学名誉教授及び小林 誠高エネルギー加速器研究機構名誉教授がノーベル物理学賞を受賞されることになりました。今回、現在日本学術振興会理事として活躍されている小林先生に、研究生活でのエピソードや本学への助言などについてお話を伺いました(10月30日、日本学術振興会にて)。

—本日はお忙しい中お時間を取っていただき、誠にありがとうございました。今回ノーベル物理学賞受賞のもととなった論文が京都大学理学部助手時代に益川先生と打ち立てられた理論だとお聞きし、京都大学時代のエピソードなどをお伺いに参りました。よろしくお願いたします。

さて、益川先生はいつも小林先生のことを秀才だというようなことを仰っていますが、小林先生から見られた益川先生は、どのような方ですか？  
小林理事：非常にユニークな人で、数学的センスが非常にあって、鋭い論理で議論する。そういうところが一番印象的ですね。

—名古屋大学から京都大学の助手に応募されたということですが、応募されたきっかけは何だった

のでしょうか？

現在もオーバードクター問題というのが深刻ですが、当時からそういう時期でした。ドクターを出たらどこか行くところを探さないといけなかったんで、公募が来たらアプライしていました。そのうちのひとつだったのです。



—その結果、京都大学理学部の助手になられ、益川先生とまたご一緒されることになったわけですが、その京都大学時代の思い出はどういった

ものがありますか？

その前、名古屋大学の時から共同研究をしてみました、また同じところになったのだからもう少し新しいことをやろう、ということで始めた仕事なのです。この仕事は数ヶ月かかりましたが、夏休み頃にはもう終わっていました。ただ、その間は非常に議論し続けていました。毎日のように議論をしていたという感じですね。実はその後は、益川さんとはあまり共同で論文を書いているのではありません。それぞれが違う相手を見つけて研究をしていたので。もちろん研究室の中ではいつも一緒に大学院生と議論したりして、とにかくいろいろ賑やかな研究室でしたね。

—いつも名古屋大学では、上下に関係なく議論を進めていったということを仰っていますが、京都大学の理学部時代に、その精神を引き継がれていったのでしょうか？

そう言って良いと思います。その頃の研究室の先生方も我々に自由にやらせてくれました。益川さんも助手でしたけれども、大学院生の人と本当に友達付き合いという感じでやっていましたね。

—益川先生が考えられた理論を小林先生がこれはダメだというふうに仰ると、いつもお話しされていますが。

それは益川さんがそう思うのだろうけれども（笑）、それほどそうだったという気はしていません。とにかく毎日考えてきたことを議論するとい



う、そういう関係でした。

—益川先生は、その理論が証明されたときは嬉しかったと仰っていましたが、小林先生はどういうご感想をお持ちですか？

証明されたときというのはどこを指すかということなのですが、これは非常に難しいですね。三十何年経っていますから、その間に少しずついろいろなことが分かってくるわけです。例えば新しい種類の粒子の6個目までが順番に分かってくるし、CPの破れのメカニズムがこうだということを経験して最後に証明したBファクトリーの実験など、それ全部合わせて三十何年かかったということになるわけです。だから、明確に途中で証明されたということではなくて、何か見つかる、次はこれを示さなければいけないんじゃないかという、そういう状況が続いていたわけです。

—今回受賞の対象となった研究は、夏休み頃には終わっていたということですが、その後の研究との関わりはどういったものだったのでしょうか？

僕の場合は、結構ランダムに小さなことをいろいろやりました。やっているときはそちらに集中していますが、この研究のことを忘れていたというわけではありません。いろいろな形で実験的な証明というか、実験の企画と結びついていましたので、実験家の人たちとしょっちゅう議論するという形では、この問題はずっと意識していました。Bファクトリーがそうですし、その前に高エネ研でトリスタンという加速器を作ったときも、もちろんその6番目のクォークを探すというのが一つのテーマだったわけで、そういう議論とか実験にはひと通り関わっていました。そういう意味では、自分の本来の理論の方じゃないけど、付き合い続けていたという、そういう感じはあります。

—この理論を出されたとき、これは自信があるんだという、そういう感じだったのですか？

内容的にいうと、二つのことがありますね。一つは、仮説も含めて、当時知られていた範囲ではどうしてもCPの問題は説明できない。そこから必然的に何か未知のものがあるのだということは、我々は論理的に証明できたと思っていたので、そこまでは非常に確信があったわけですね。そこから先どういう可能性があるのかということで、6元模型というのが出てきたわけですね。それについては、その時点では、ロジカルな根拠は無かったです。あくまでも一つの可能性に過ぎないということです。その時点では6元模型に確信は持っていなかったですね。

—あの論文が京都大学学術情報リポジトリというところに掲載されているのですが、今非常にアクセス数多くて、みなさんもの凄く関心を持って見ておられます。

ところで、今まで研究のお話ばかり伺っていましたが、余暇はどのように過ごしておられたのでしょうか？

せっかく京都に来たのですから、休みの日はその辺の観光地とか、寺社巡りなどは結構やりましたね。大学院生と一緒に出かけることもよくありました。研究室から行くという企画も何度もありましたし、本当に数人だけで出かけることもありました。

—先生は、名古屋大学と京都大学の両方におられたわけですが、学風の違いは感じられますか？

そうですね、多少はありますよ。名古屋大学では坂田昌一先生が主宰されていたし、京都大学では湯川秀樹先生は基礎物理学研究所に移られていましたけれども、理学部の旧湯川研、お二人のキャラクターの違いみたいなものは、研究室の雰囲気の中にもありましたね。

—名古屋大学の坂田先生は大変偉大な先生だと思わうのですが、京都大学では湯川先生が非常に有名

です。そういう先生方のそばで研究されるということの良い面は何でしょうか？

皆ある意味で、それぞれの人がある巡り合わせでいろいろな環境に来るわけですよ。それがいろいろ違っていることによってスタイルなりが出てくるわけで、バラエティーがあるということが非常に重要なわけですね。だから、湯川研には湯川研の特徴があって、そういう背景のもとにいろいろな仕事をするということになります。そこが良いところだと思います。



—今の京都大学の学生に対して、大事にしてほしいことは何でしょうか？

京都は、環境的には非常に恵まれていますよね。先生も高いレベルの人が多くいますし、外部の人との交流という意味では、例えば理論分野だったら基礎物理学研究所が共同利用研究所としてあって、交流の中心になっています。また、たくさんいろいろな人が京都に来ますので、非常に恵まれた条件にあると思います。だからいくらかでもチャンスがあるという恵まれた条件を生かしていただきたいなと思います。

—先日、先生が理学部時代に在籍されていた研究室に現在おられる学生さんたちの話を聞く機会がありまして、小林先生、益川先生お二人が在籍されていたということが本当に光栄で、自分たちの力になるというようなことを言っていました。

それはありがたいですね(笑)

—その一方で、今は理系離れと言われており、京都大学でも理系の博士課程の大学院への進学率が落ちているという状況が起きています。そういう

ことに対して、先生から見られて、もっとこうしてはどうかといったことはありませんでしょうか？

大学院レベルでも実際減っているのですか？僕は素粒子なんかの分野に来る大学院生の質とか意欲とかはそんなに変わっていないのではないかなという気がするのですけれど。確かに高校とかそういったところで理科離れということはよく言われているわけですが、今の先端の研究というところはもの凄く専門が進んでいて、中学・高校でやっていることとの間の距離は凄く離れているわけですね。そこで何かをやればそういう研究の雰囲気近づけるかということ、なかなかそういうわけにはいかないわけです。やはりいろいろな基礎的なことを学んで、そういう知識なり技術なりを付けないと、本当の先端に行けない。その道程の間である意味息切れがしてしまうということではないかなという気がするのです。だから、少しずつでも知識なり理解なりが進むという中で、喜びとか面白さを感じるということが大事ではないかなと思います。そういう意味で中学・高校のカリキュラムがそういうのを可能にしているかというのが気になるというか、その辺りに問題があるのではないかなという気がします。高校なら高校で、これだけのことを終えて、問題を解きますというのではなくて、習うこと自身が新しい発見や新しい理解だという、少し感動とかそういうものが伴うようにならないのかなと思います。

—京都大学でジュニアキャンパスという中学生向けの体験講座を開催しているのですが、そこで実験とか工作とかをすると、中学生の目が凄く輝いてきますね。今の中学・高校では、そういう経験自体をさせてもらえないのではないかなと思います。博士課程の学生への経済的支援や若手研究者のポストなど、大学院生自体も展望が持てなくなっています。また、今回のノーベル賞の受賞で日本の基礎研究に光が当てられたと言われている

ですが、本当に今、基礎研究に光が当たっているかということ、そうは言えないのではないかと思うのですが、いかがお考えでしょうか？

やはり一番大学の人から苦しいと言われているのは、国立大学では運営費交付金、私学の場合は助成金ですが、毎年1%ずつカットされています。そういうものの一番直接的なしわ寄せが日常的な研究費の部分に来ているように思います。ですから、科研費のように、既にある課題があって申請するという一種の競争的資金は増えていますが、それ以前の段階の、本当にベースになる日常的な研究費というのが厳しい状況にあるというのは事実ではないかなと、その辺を何とかしなければいけないだろうと思います。

—京都大学では、この10月に松本総長に交代しましたが、松本総長もやはり京都大学の基礎研究を大事にしていかなければならないと申しております。今回の受賞が小林先生の京都大学時代に出された論文ということで、非常に光栄に思いますし、小林先生と益川先生が培われてきたものは大事にしていきたいと思います。最後に、何でも結構ですので、京都大学にメッセージをお願いいたします。

もちろんこの仕事を京都でやってきたということで、京都は非常に思い出深いところです。京都には非常に歴史もありますし、恵まれた良い条件もありますので、これからも京都大学から非常にオリジナリティー溢れる成果が次々と出てきてほしいと思います。

—お忙しいとは思いますが、是非京都大学にお越しいただいて、後進の学生や教職員にお話しくださる機会を作っていただければ幸いです。またお会いできるのを楽しみにしておりますので、是非よろしくお願いいたします。本日はお忙しいところどうもありがとうございました。

(総務部)



## 近畿地区国立大学体育大会の成績

奈良女子大学が当番校で開催された第46回近畿地区国立大学体育大会は、5月4日(日)の「ラグビー」から8月28日(木)の「弓道」まで、17競技種目において熱戦が展開された。

本学は、「水泳(男子)」「テニス(男子)」「ソフトテニ

ス(男子)」「剣道(男子)」「ハンドボール(男子)」「弓道(女子)」で優勝し、各競技において実力を発揮した。総合成績では、男子が2位、女子は5位であった。なお、本大会の成績は以下のとおりである。

(学生センター)

得点表(男子)

種目NO	種目別	大学名										
		滋賀大	京大	京教大	工織大	大阪大	大教大	神戸大	兵教大	奈教大	和	大
1	陸上競技			7		5	10	4				
2	水泳		10			5	7					4
3	野球	5		10	4		7					
4	軟式野球	7	4					5	10			
5	テニス		10		4	5	7					
6	ソフトテニス	4.5	10				7	4.5				
7	バスケットボール					7	5	10		4		
8	バレーボール			7				4.5	10	4.5		
9	サッカー			4		5	10					
10	ラグビー					5	7	10				4
11	卓球				4	10		7				5
12	バドミントン		5	4		7		10				
13	柔道		5				10	4				7
14	剣道		10			5	7	4				
15	体操競技		5			7	10					
16	ハンドボール		10	4	5		7					
17	弓道	4		5	10							7
合計得点		20.5	69	41	27	61	94	63	20	8.5		27
総合順位		8	2	5	6	4	1	3	9	10		6

得点表(女子)

種目NO	種目別	大学名											
		滋賀大	京大	京教大	工織大	大阪大	大教大	神戸大	兵教大	奈教大	奈女大	和	大
1	陸上競技			10		5	7						4
2	水泳		5			7	10					4	
5	テニス		7	4			5	10					
6	ソフトテニス	4.5					7	10		4.5			
7	バスケットボール		5	7			10						
8	バレーボール			4.5		4.5	10					7	
9	サッカー			7			10		4.5	4.5			
11	卓球		5			7	10					4	
12	バドミントン			5			10	7				4	
14	剣道	7				5	10					4	
15	体操競技			7		5	10						
16	ハンドボール			7			10	5					4
17	弓道	4	10					5				7	
合計得点		15.5	32	51.5	0	33.5	109	37	4.5	9	30	8	
総合順位		7	5	2	11	4	1	3	10	8	6	9	

## 全国七大学総合体育大会の成績

第47回全国七大学総合体育大会は、平成20年7月5日(土)の開会式を挟み、同19年12月8日(土)の「アイスホッケー」を皮切りに同20年9月22日(月)の閉会式まで、41競技種目(公開競技2種目を含む)にわ

たり、東北大学の主管で開催された。

昨年度優勝に引き続き連覇を目標に臨んだ本大会ではあったが、本学は残念ながら、4位となった。(学生センター)

	北海道大学		東北大学		東京大学		名古屋大学		京都大学		大阪大学		九州大学		
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
アイスホッケー	2	8	1	10	5	3	6	2	4	4	3	6	7	1	
航空	5	3	不参加		4	4	1	10	2	8	6	2	3	6	
スキー	不参加		不参加		1	10	3	6	5	3	2	8	4	4	
馬術	4	3	1	8	2	6	不参加		3	4	該当団体なし		5	2	
アーチェリー	7	1	2	8	5	3	4	4	6	2	1	10	3	6	
空手道	男子	5	3	3	6	1	10	7	1	2	8	4	4	6	2
	女子	5		5		1		5		4		3		2	
弓道	男子	2	8	1	10	3	6	6	2	4	4	7	1	5	3
	女子	2	8	1	10	7	1	6	2	4	4	5	3	3	6
剣道	男子	1	10	2	8	4	4	5	3	6	2	7	1	3	6
	女子	5	3	4	4	2	8	6	2	7	1	3	6	1	10
硬式庭球	男子	7	1	3	6	4	4	2	8	1	10	5	3	6	2
	女子	4	4	1	10	3	6	2	8	6	2	5	3	7	1
硬式野球	5	3	2	8	不参加		4	4	不参加		3	6	1	10	
ゴルフ	3	6	4	4	5	3	2	8	1	10	6	2	7	1	
自動車	3	6	2	8	6	2	4	4	5	3	1	10	7	1	
柔道	5	3	1	10	2	8	6	1.5	3	5	3	5	6	1.5	
準硬式野球	3	6	4	4	5	3	1	10	2	8	6	2	不参加		
少林寺拳法	男子	4	4	2	8	5	3	7	1	3	6	1	10	6	2
	女子	4	4	5	3	3	6	6	2	2	8	1	10	7	1
水泳	6		1		3		2		4		7		4		
相撲	男子	5	3	6	2	7	1	3	6	4	4	2	8	1	10
	女子	1	10	不参加		不参加		3	6	4	4	2	8	5	3
ソフトテニス	該当団体なし		5	2	3	4	2	6	4	3	1	8	6	1	
体操	1	10	5	3	3	6	4	4	6	2	2	8	7	1	
卓球	男子	2	8	1	10	6	2	3	6	5	3	4	4	7	1
	女子	4	4	3	6	6	2	2	8	7	1	1	10	5	3
バスケットボール	男子	3	6	6	2	1	10	2	8	5	3	4	4	7	1
	女子	4	4	1	10	7	1	3	6	2	8	6	2	5	3
バドミントン	男子	2	8	6	2	4	4	7	1	5	3	3	6	1	10
	女子	1	10	2	8	6	2	3	6	7	1	5	3	4	4
バレーボール	男子	4	4	7	1	2	8	1	10	3	6	5	3	6	2
	女子	7	1	4	4	6	2	5	3	1	10	2	8	3	6
ハンドボール	7	1	2	8	4	4	1	10	5	3	6	2	3	6	
フェンシング	5	2	2	6	3	4	該当団体なし		1	8	4	3	6	1	
ヨット	5	3	6	2	3	6	7	1	4	4	2	8	1	10	
ラクロス	男子	3	6	7	1	2	8	6	2	4	4	1	10	5	3
	女子	不参加		2	8	1	10	不参加		3	6	4	4	5	3
陸上競技	男子	5	3	1	10	6	2	4	4	2	8	3	6	7	1
	女子	1	10	7	1	4	3.5	2	8	6	2	3	6	4	3.5
総合得点	179		215		170.5		181.5		181		213		141		
総合順位	5		1		6		3		4		2		7		

## 中学生向けゼミ体験講座「京都大学ジュニアキャンパス2008」を開催

9月20日(土)・21日(日)の2日間にわたり、中学生に学問の最先端に触れてもらうことを目的として「京都大学ジュニアキャンパス2008」を京都市教育委員会との共催により開催した。

今年で4回目を迎えるジュニアキャンパスには、京都市や近郊地域のみならず遠くは関東、九州からの申し込みがあり、中学生約250名・保護者等約100名の参加があった。

1日目の午前中は、開講式及びオリエンテーションを実施の後、「ナノテク・ロボット・電気自動車－活躍する京大発ベンチャー」と題する中学生向け特別講義を、またそれと並行して保護者等向け講演会「思春期の子育てを考える－男の子育て、女の子育て－」も開催した。

1日目の午後と2日目は、吉田・宇治・桂の各キャンパスや花山天文台等の研究施設において実験、工作、自然観察、天体観測などの体験型のゼミや、テキストをもとに議論するゼミなど、少人数制による32講座のゼミを開講した。2日目の午後には、並行して時計台免震装置・尊攘堂・総合博物館を見学する「キャンパスミニツアー」を実施し、こちらに参加

される方もあった。

今年度は、お昼の休憩時間に新企画「大学院生等によるポスターセッション」を実施し、大学院生が普段どのような研究を行っているかを中学生に分かりやすく説明するなど、大学院学生との交流もあった。また、昨年引き続き中学生からの素朴な疑問に学部生が答える「大学何でも相談コーナー」も設置、ここでは中学生からの活発な質問が飛び出していた。



ゼミ「マグマ科学－火山はなぜ個性的か？－」

(教育推進部)

## 「京都大学シニアキャンパス2008」を開催

10月1日(水)から3日間、京都府商工労働観光部、宇治市観光協会等の協力を得て「京都大学シニアキャンパス2008」を開催した。4年目を迎えた今回は、定員50名に対し過去最高の75名もの応募があり、抽選の結果、北は北海道から南は九州まで、全国から30歳代～80歳代の45名の方の参加があった。

「交響する身体－千年のときを歩く－」をテーマに、初日は時計台記念館において、「歓迎の挨拶」を皮切りに、「オープニング講義」、「参加者交流タイム」、西山良平人間・環境学研究科教授による講義「西暦1000年前後の平安京」のほか、「授業参加企画」や「学びの夕べ」を行った。

また、2日目は宇治キャンパスに移動し、小山勝二理学研究科教授による講義「京都1000年の天文学

散歩」を開講、その後、宇宙太陽発電所研究棟などの施設見学を行った。午後には宇治平等院や宇治上神社などでフィールド学習を行い、さらに夕刻から



学びの交流(源氏のついで)

「学びの交流」と題して、地域サークル「源氏のつどい」の方々とも交流をもち、「学び」についての活発な意見交換を行った。

最終日は吉田キャンパスに戻り、5名程度のグループに分かれて教員と直に触れあうミニゼミや、午後の全学共通科目の授業に参加、学生と同じ目線で真剣にノートを取っている受講者の姿も見られた。最後に、この3日間のまとめと各自の次の一歩への

取組を発表する「学びを振り返るゼミナール」が行われ、3日間の課程を修了した受講者一人ひとりに、西村理事・副学長から修了証書が手渡された。

今回のシニアキャンパスは、昨年までと違った新しい企画を取り入れ、大変好評であった。受講者から来年も引き続き実施してほしいとの声が多く寄せられた。

(教育推進部)

## 宇治地区自衛消防団が消防訓練大会に参加

宇治地区自衛消防団は、10月2日(木)に宇治市西宇治公園で開催された宇治自衛消防隊連絡協議会主催の第34回消防訓練大会に出場した。

宇治地区自衛消防団は宇治地区においての火災、その他のあらゆる災害や非常事態の発生に備え、迅速かつ確かな消火活動と被害拡散防止のために設けられている。同消防団員は、大会参加に向け放水訓練と消火栓等消防設備の操作手順などの訓練を自主的に行っていたが、その成果を発揮する機会となった。

本大会は宇治市役所をはじめ宇治市を所在地とする企業、工場、医療機関など17事業所延べ35チーム149人が参加し、消火器操法、屋内消火栓操法、及び屋外消火栓操法で訓練の成果と技術を競い合った。



放水操作をする宇治地区自衛消防団

(宇治地区事務部)

## 防災カフェを開催

10月4日(土)、café 進々堂において、防災カフェ「関西壊滅!?大地震!君は生き残れるか?」が開催された。講師の佐藤裕一工学研究科助教が、(1)もし上町断層や花折断層で地震が起きたら、(2)もし海溝性の長周期地震が起きたら、という2つの可能性について、模型実験を交えながら解説した。

カフェ終了後、参加者から阪神大震災の体験を聞かせていただいたほか、琵琶湖西岸断層の被害予想への質問も寄せられた。

カフェ当日は天候も良く、屋外のテラス席で美味しい飲物をいただきながらの進行となった。

なお、本カフェ開催にあたってはcafé 進々堂にご協力いただいた。



カフェの様子

(大学院工学研究科)

## 宇治キャンパスクリーン作戦を実施

宇治キャンパスでは、10月17日(金)に宇治キャンパスクリーン作戦を実施した。これは、10月18日(土)・19日(日)に開催される宇治キャンパス公開に先立ち、宇治地区教職員及び学生がキャンパス内の環境整備を行うために実施したものである。

クリーン作戦開始時間の午後4時になると、集合場所には400人を超える教職員及び学生が集まった。はじめに生存圏研究所副所長の今村祐嗣教授の挨拶が行われ、次に宇治地区事務部施設環境課池田幸雄課長から、環境整備にあたっての参加者への注意及び説明が行われた。

参加者は配布された清掃道具を手に、各々に割り当てられた箇所为重点的に清掃を行い、また協力しながらキャンパス構内のごみや落葉を拾うなど、積極的に構内清掃に努めた。終了時刻の午後5時前に

なると大量のごみを収集場所に運ぶ参加者の姿が見られ、教職員及び学生の構内美化に対する意識を高める良い機会となった。



集合場所に集まった参加者

(宇治地区事務部)

## 訃報

このたび、やまもとじゅんいち山本 淳 一名誉教授、あかいこういち赤井浩一名誉教授が逝去されました。ここに謹んで追悼の意を表します。以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

### 山本 淳一 名誉教授



山本淳一先生は、8月26日逝去された。享年74歳。

先生は、昭和31年3月京都大学文学部文学科を卒業、同33年3月京都大学大学院文学研究科修士課程修了、同38年3月同博士後期課程単位取得退学後、同年4月京都大学文学部助手に採用された。同40年4月から同43年3月まで立命館大学講師、助教授を経て、同年4月京都大学教養部助教授に採用、同59年4月教授に昇任、平成4年10月総合人間学部教授に配置換となり、同8年3月退官、同年4月京都大学名誉教授の称号を授与された。その後、摂南大学国際言語文化学部教授、同学部長を歴任された。

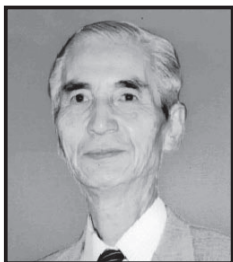
先生の本学における教官歴は、通算すると30年の永きにわたり、その間、教養部・総合人間学部においてフランス語教育に従事し、一般教育に寄与するとともに文学部及び大学院文学研究科においてフラ

ンス文学の講義及び研究指導に当たり、さらに総合人間学部では文明論講座を、大学院人間・環境学研究科においては、ヨーロッパ文化・環境論講座を担当し、多くの後進を育成するなど、専門教育に貢献した。

研究面においては、中世フランスにおけるアレゴリー文学を専門分野とし、特に『地獄の夢』や『メロジス・ド・ポールレゲ』で知られる作家、ラウル・ド・ウーダンを主たる研究対象とした。また、先生は、『白水社仏和大辞典』、『小学館ロベール仏和大辞典』の編集によって日本のフランス語フランス文学の発展に寄与するとともに、フェルナン・ブローデル『物質文明・経済・資本主義15-18世紀 第2部「交換のはたらき」』、ブーガンヴィル『世界周航記』など基本文献の正確な翻訳を行い、幅広いユマニスト的業績を挙げられた。

(大学院人間・環境学研究科)

## 赤井 浩一 名誉教授



赤井浩一先生は、9月26日逝去された。享年81歳。

先生は、昭和25年京都大学工学部土木工学科を卒業後、同27年京都大学工学部講師に任ぜられ、同29年同学部助教授、同30年京都大学防災研究所に配置換、同35年京都大学工学部助教授に配置換後、同37年同学部教授に昇任し、土木工学科建設機械学講座・土質力学講座及び交通土木工学科路盤基礎工学講座を担当、同49年より3年間京都大学防災研究所併任教授を務めるとともに、同56年より2年間京都大学評議員、同60年より2年間京都大学工学部長、京都大学評議員並びに京都大学大学院工学研究科長を務められた。また、同62年より本学大学院審議会制規等専門委員会委員長、さらに平成元年より京都大学教育研究の高度化

に関する調査研究会副会長を務め、学内行政にも尽力された。同2年京都大学を停年退官され、同年京都大学名誉教授の称号を受けられた。同年財団法人大阪土質試験所(現地域地盤環境研究所)理事長、同14年より18年まで財団法人地域地盤環境研究所会長を務めた後最高顧問に就任された。

先生は、土の強度・圧密変形、浸透問題、動力学、岩の力学の分野において先駆的な研究をされ地盤工学、岩盤工学の発展に寄与された。また、教育と研究指導に尽力され、多くの人材を育成するとともに、日本学術会議力学研究連絡委員会委員、同土質基礎工学研究連絡委員会委員、大学基準協会基準委員会委員等を歴任し、さらには土質工学会(現地盤工学会)会長を務められた。これら一連の教育研究活動、学会活動により、平成17年4月29日瑞宝中綬章に叙せられた。

(大学院工学研究科)

## お知らせ

## 無料法律相談のお知らせ

—12月実施分について申し込みを受付中—

法科大学院では、授業の一環として行う法律相談実務演習(リーガル・クリニック)において、無料法律相談を実施しております。

この無料法律相談は、日常生活の中で生じるさまざまな法律問題について、弁護士の立会いと指導のもと、既に法律知識を習得している法科大学院3年次の学生が市民の方々からのご相談に乗り、必要な助言を行うものです。(秘密は厳守いたします。)

現在、12月実施分について申し込みを受付中です。

(実施日)12月1日(月)、2日(火)、3日(水)、4日(木)、5日(金)

なお、1～3月は、無料法律相談はありません。

平成21年度は、3月下旬から(相談実施は4～7月)の受付となります。

[問合せ先]

京都大学法科大学院 リーガル・クリニック担当

TEL :075-753-3262 FAX :075-753-3129(午前10時～午後5時/土日祝休)

詳細は京都大学法科大学院ホームページをご覧ください。

<http://lawschool.law.kyoto-u.ac.jp/kusunoki.html>

(法科大学院)

## 能楽鑑賞会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を次のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれましては、是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

ご来場をお待ちしております。

1. 日 時：12月10日(水) 開場：17：30  
開演：18：30(開演後の入場はご遠慮願います。)  
終演：20：30(予定)
2. 会 場：京都観世会館 京都市左京区岡崎円勝寺町44 TEL：075-771-6114  
(東山仁王門を東へ約300メートル)
3. 演 目：狂言 千鳥 茂山 千三郎  
茂山 千五郎 他  
能楽 敦盛 片山 清司  
二段之舞 福王 和幸  
片山 九郎右衛門 他

- 備考 1. 入場無料(入場の際は、学生証又は職員証を提示してください。)  
2. プログラムは当日に会場で配付します。  
3. 定員は550名先着順とします。  
4. 問合せ先：学生部学生課学生企画グループ TEL(内線)2504・2588

(学生部)

## 生態学研究センター オープンキャンパス

京都大学大学院理学研究科の協力講座である京都大学生態学研究センターは、生物科学専攻に属する生態科学Ⅰおよび生態科学Ⅱの2つの分科から大学院生を受け入れ、生態学の研究教育活動、人材育成に積極的に取り組んでいます。研究分野は、水域生態学・熱帯生態学・生物間相互作用・理論生態学・分子解析生態学・保全生態学です。

このたび、京都大学大学院生(修士または博士課程)として、生態学研究センターにおいて生態学の研究に取り組みたいと考えておられる方を対象に、以下の日程でオープンキャンパスを開催します。当日は研究内容についての紹介、研究施設の見学会などを行います。さらに詳しく知りたい方には、各研究室を直接訪問して頂き、教員、研究員や在学院生から直接話を聞くことができます。関心のある方はお気軽にご参加ください。

また教員の方で、学部学生・修士課程学生などで関心のある方が周囲におられましたら、是非お伝えください。研究スタッフなどの詳しい情報については、ホームページ <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください。

1. 日 時：12月13日(土) 研究内容説明会： 9：00～11：20  
研究施設巡回： 11：30～12：30  
研究室訪問： 13：30～17：00
2. 場 所：生態学研究センター(大津市平野2丁目509-3)  
JR 瀬田駅からバスをご利用ください。詳しくはホームページをご覧ください。
3. 問合せ先：陸域生物相互作用分野 大串隆之(E-mail：ohgushi@ecology.kyoto-u.ac.jp)
4. 申込方法：(12月5日まで)

氏名・所属・学年・住所・電話番号・メールアドレス・希望研究分野を書いて、以下のいずれかの方法でエントリーしてください。

E-mail：open@ecology.kyoto-u.ac.jp FAX：077-549-8201

はがき：〒520-2113 大津市平野2丁目509-3 京都大学生態学研究センター 川田 宛

(生態学研究センター)

## 隔地施設 紹介

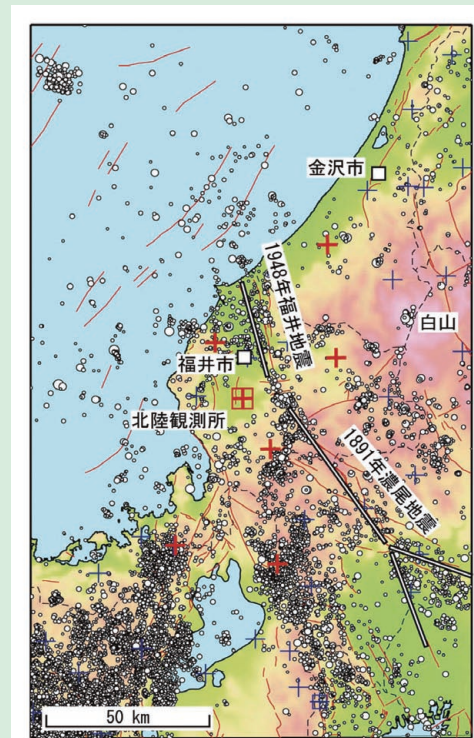


### 防災研究所 附属地震予知研究センター 北陸観測所

(<http://www.rcep.dpri.kyoto-u.ac.jp/main/obs/hkj/hkjJ.html>)

北陸観測所は、福井県鯖江市の緑豊かな三里山の麓にあります。鯖江市は日本最古の伝統を持つ越前漆器の産地として、また、めがねフレームの生産日本一としても知られています。福井県の自然災害といえば、最近では平成16(2004)年の福井豪雨災害などが記憶に新しいところですが、忘れてならないのは、ちょうど60年前、昭和23(1948)年に発生したマグニチュード7.1の福井地震です。福井地震は都市域の直下に発生し、死者約3,800人、家屋倒壊36,000戸以上という甚大な被害をもたらしました。気象庁の震度階は、当時6が最大でしたが、この地震による家屋倒壊率の大きさを表現するために新たに震度7が制定されました。北陸地方では福井地震の他にも多くの被害地震が過去に発生し、また活断層が多く分布しています。大きい地震に比べて多数発生する微小地震(マグニチュード3以下)を高感度で観測することにより、北陸地方における地震活動や地殻構造等の特性を解明することを目的として、この地に北陸観測所が設立されたのです。

北陸観測所は、昭和45(1970)年に地震予知研究計画に基づいて、防災研究所附属北陸微小地震観測所として設置され、昭和49(1974)年に本館等の建物が竣工しました。その後、平成2(1990)年に防災研究所附属地震予知研究センターが設立されるとともに、同センター北陸観測所と名称を改めて、現在に至っています。設置当初から平成2年までは、計4名の教員が順次、観測所に勤務しました。それ以降は、担当の教員は宇治キャンパスの地震予知研究センター及び関連部門に所属して、観測所の運営及び研究を担当しています。技術職員は1名で、技術室



北陸観測所及びその観測点(赤い+)のデータにより震源決定された1976年～2007年の地震分布。1948年福井地震及び1891年濃尾地震の断層面を白い線で示す。



観測坑内に設置された高感度地震計



長として宇治に勤務した5年間あまりを除いて、ずっと現地勤務により観測維持にあたっています。

北陸観測所の特徴の一つは、格子状に掘削された総延長560mもの観測坑を持つことです。この中に高感度地震計をはじめ、広帯域地震計、強震計、伸縮計、傾斜計などの測定機器を設置して、地震、地殻変動の観測を行っています。また、地球磁場や自然電位の測定も行われています。観測坑は、他大学の研究者にも観測や機器開発の場として有効に利用されています。例えば、坑道内に存在する地質断層の挙動を調べるための三次元相対変位計の開発や、ラドン濃度の連続測定などの研究が行われてきました。



地震観測点の保守  
(石川県小松市)

北陸観測所の観測坑以外にも、石川、福井、滋賀3県の6カ所に地震観測点を設置し、1976年以降、テレメータによる微小地震観測を行ってきました。これらのデータは現在、宇治キャンパスの地震予知研究センターでも自動処理されるとともに、気象庁にもリアルタイムで伝送され、全国の地震観測データの一元化処理に使用されています。北陸観測所による約30年間に及ぶ微小地震の震源分布は、北陸地方の地震活動特性を明らかにしてきました。福井平野の東縁部に北北西-南南東方向に延びる地震分布の多くは、福井地震の震源断層(全長約30km)に沿う余震活動と考えられます。これから更に南東方向に延びる地震分布は、濃尾地震(1891年, M8.0)の震源断層(全長約80km)を含む活断層帯に沿うものです。琵琶湖北東部の柳ヶ瀬断層帯にも活発な微小地震の活動帯が分布し、白山火山及び周辺の山岳直下にも地震活動が見られます。一方、北陸観測所を中心とする半径約10kmの領域内には微小地震がほとんど発生していません。いわゆる地震活動の空白域です。北陸観測所で記録された地震の波形データを詳細に解析すると、この空白域では周辺の活断層帯に比べて地震波の散乱が弱く、地殻の媒質がより均質であることが推定されています。福井地震の震源断層は地表に現れない伏在断層であり、その地下における位置の推定をはじめ、地震学的な調査を行うことは、北陸観測所の重要な研究課題の一つです。これまで、人工的に発生させた地震波を用いて基盤構造のずれを検出し、繰り返し地震を発生させてきた断層が地下に存在することを推定しました。福井平野における重力の測定から地下の密度構造を推定し、断層の水平方向への広がりを推定する試みも行われてきました。また、断層に沿う精密な震源分布を推定するとともに、上に述べた地震波形の解析により、地震波を強く散乱する構造としての断層の深部形状が詳細に調べられつつあります。その他にも、地震観測データにもとづいて北陸地方の地殻の三次元速度構造や、地震の震源域に働く応力場、地質構造と地震活動度との関係等が調べられています。今後、北陸観測所により蓄積された地震データベースの解析をさらに進めて、北陸地



見学者(地元小学校の6年生)に  
伸縮計と傾斜計の原理を説明

方の活断層を含む詳細な地殻構造と地震発生特性の解明をめざします。

北陸観測所の担当教員は、理学研究科の協力講座教員として、学生が北陸観測所のデータを用いて上述のような研究課題を行ううえでの指導を行っています。金沢大学や富山大学をはじめとする北陸地域の他大学や高専とも長年にわたる交流があり、他大学の学

生が観測所を訪問してデータ利用・解析する際の研究指導や、年2回の北陸地震研究会を開催して幅広い研究交流を行っています。また、地元の小学校に出向いて地震についての特別授業を行い、防災関係機関で講演を行うこともあります。地元の小中学校、高校や防災関係機関からの観測所施設の見学依頼にも、可能な限り宇治から教員が出かけて対応しています。特に今年は、福井地震60周年シンポジウムを、福井県や福井市、坂井市とともに開催し、地元住民への防災知識の普及及び地元研究者との研究交流を推進しました。宇治キャンパスからも学生が参加し、過去の地震災害や幅広い研究成果に触れる良い機会でもありました。なお、本館建物の壁面には地震観測所に相応しく沈み込むプレートを模したモニュメントが取り付けられていま

すが、これは長年にわたり交流のある福井高専の教員・研究者の協力を得て作成されたものです。

隔地の地震観測施設は、その地域における基本的な地震観測データの蓄積や解析・研究の推進による学術的な寄与はもちろんのこと、地元住民や行政機関への防災知識の伝達・普及による地震被害軽減への寄与という重要な役割も持ちます。

### 職員構成

教員（兼任） 3名  
技術職員（再雇用） 1名

〒916-0034 福井県鯖江市下新庄町88下北山29

TEL：0778-52-2494 FAX：0778-51-8092

### アクセス

- ・京都駅からJR北陸本線鯖江駅下車、徒歩25分、または鯖江駅からつつじバス新横江線（1日4便）新町下車、徒歩2分
- ・北陸自動車道鯖江ICで降り、国道417号線沿いに南東方向へ5分



福井地震60周年シンポジウムを開催



見学中の鯖江市長(中央)と観測所正門にて